REDZONE

柊　雪華

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト
http://pdfnovels.net/

注意事項

このＰＤＦファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にＰＤＦ化させたものです。

この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのＰＤＦファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】
ＲＥＤＺＯＮＥ

【Ｎコード】
Ｎ７８００Ｓ

【作者名】
柊　雪華

【あらすじ】
新任教師である森田純に片思いをしている美濃智美。あれこれと先生にカマをかけるのだが、先生はまったく気づかない。あまりにも鈍い先生と、積極的な女子高生。その恋の行方は……？

今は政治経済の授業の真っ最中。先生の板書をノートに写しながら。念仏みたいな先生の声に耳を傾けようとする、けど、だめだ。あたし、こと美濃智美にはできない。

「……これを運動方程式といいます。あとから重要になるのでしっかり覚えておくように」

隣の教室では物理の授業が行われている。物理はあたしも履修しているからこの声はしょっちゅう聞けるんだけど、それだけじゃ物足りない。そんなわけで、あたしは授業そっちのけで、隣の教室から聞こえる声に耳を傾けていたのだった。

声の主は森田純先生、担当科目は先ほど言ったとおり物理。

今年からこの高校に転勤してきたのはいいんだけど、なんと新任式に遅刻という前代未聞の出来事をやらかした、とんでもない人。結局壇上の花が足りなかったっていうから取りに行って、その結果新任式に遅れたみたいだったけど。

整った顔立ちとさらりときれいにまとまった髪、そしてその笑顔に、あたしは一発で一目惚れしてしまったんだ。だから、森田先生が副担任になったと聞いて内心一人で喜んでいたっけ。おかげで自己紹介のとき何をしゃべればいいかわからなかったけど。

気づいたら政治経済の授業はとっくに終わっていて、全員起立し、先生に「ありがとうございました」と挨拶をする。

「ほんと智美ちゃんったら好きだよねー、森田先生のこと。授業聞いてなかったでしょ」

ワンテンポ遅れて立ち上がったのがバレたらしい。後ろの席に座っている親友の加藤詩織が声のトーンをいつもより落としてあたしを小突く。

「あ、う……あはは、バレてた？」
「あったりまえでしょー。にしても森田先生ってば声でっかいから全然今田先生の声聞こえなかったよ」
そう。政経担当の今田先生は念仏みたいにぶつぶつ喋るから大事なところも聞き取りづらくてかなわない。対して森田先生の張りのある大きな声。あたしはそんな先生の声に心地よささえ覚えていた。
「ドア締め切ってても聞こえるもんね」
「で、政経そっちのけでとっくに習った運動方程式の話を聞いてた、と」
詩織の言葉に、ぐぅの音も出ない。
「げ、次リーディングじゃん。智美ちゃん予習してきた？」
「一応してきたよー」
「ゴメン、ノート写させて！」
こんな風に日常を過ごしていても、常に森田先生のことばっかりが頭をよぎる。今日は午後の一発目に森田先生の物理の授業がある。眠くなる時間だけど、頑張らなきゃ。

「それで、この運動方程式を立ててみると……」
ノートをとりながら、ちらちらと先生に目をやる。これもいつものこと。先生の一挙手一投足も見逃さないように。先生の字は決してきれいと言えたもんじゃないけれど、それすら許せてしまえるから不思議だ。
「じゃあ直球で聞くね。運動方程式を立てた結果求められるのは？えーと……美濃、答えて」
一瞬、何が起こったのかわからなかった。めったに物理の授業では当てられないあたしなのに、珍しい。
「えっと、ａ＝ｇ　ｓｉｎθ、です」
声がひっくり返ってしまう。
「その通り。本来はｍａ＝ｍｇ　ｓｉｎθですが、左辺と右辺を……」

先生の解説は続く。高校に入ってから、自慢じゃないけどある程度真面目に授業を受けていたあたし。その中でも物理だけは別格だった。理系の大学に行きたい自分のためっていうのもあるけれど、何より先生との接点を持ちたいがために物理は特に真面目に授業を受けている。もちろん、物理担当の係はあたしが勤めている。

「はい、では今日はここまで」

チャイムと同時に、先生が教科書や解説用のノートをとんとんと教卓にまとめる。今日も何事もなく授業が終わってしまうなぁ……。

「ありがとうございました」

政経の授業のときとは違い、ワンテンポ遅れることなくちゃんと一礼。65分の授業時間はいともあっさりと終わってしまった。

「はー、なんか今日も消化不良だったなぁ」

ホームルームが終わり、科学部の活動場所である化学室に向かうあたしと詩織。1年のころは帰宅部だったんだけど、2年になって科学部に入ることにした。詩織から何度か誘われてはいたから、入ろうかなぁとはなんとなく思っていた。でも決定打はもちろん森田先生の存在。どれだけ森田先生に入れ込んでいるんだろう、あたしは。

ちなみに森田先生は物理だけでなく化学もできちゃうオールマイティーな人だ。だから科学部の顧問を任されたらしい、というのをどこかで聞いたことがある。

「消化不良って……まだ部活だってあるし、それにいくら智美ちゃんでもわかってるでしょ？教師と生徒の恋愛はご法度、って」

そう。一般的に言われるように、教師と生徒の恋愛はわが校でもご法度。もっとも、卒業後に教え子と結婚した先生もいるからその辺りは不思議でならない。

「わかってるよ……わかってるけど、好きなものは好きだし」

もう何度も繰り返された会話。そのたびにあたしは俯いて、考え込んでしまう。どうどうめぐりを繰り返す思考。あたしが先生に思

いを伝えたらどうなるか。先生に恋人がいるかどうかも実は知らない。そもそも先生のことなんて氷山の一角しか知らない。それでも「先生が好き」と自称してもいいんだろうか？

言葉少なにたどり着いた化学室で、実験の準備をする。

あたしたちの机に用意されたのは、水の入った瓶。そして板状のガラス製の蓋。教卓に用意されているのは石油につけられたナトリウム。

つまり、水酸化ナトリウムを作ってみよう、という、実に基本的な実験。始めのうちはこういった基本的なものから、時間がたつに連れて個人の立てたテーマに沿った実験を行うことになっている。

「はい、それではナトリウムを配ります。みんなこっちに来てください」

教卓に科学部の生徒……あたしを含めて１０人が集まる。細長い銀白色の金属の塊。これが金属のナトリウムだ。

「これが皆さんおなじみのナトリウムだね。えーと、美濃」

「はっはい！」

声をかけられたのは今日これで二度目。特に物理の係の仕事もなかったから、話す機会なんてほとんどないはず。なのに……。

「このナトリウム、切ったらどうなると思う？」

中学時代から理系科目が得意だったあたしには簡単な問いだった。

「切り口が一瞬で酸化します」

「正解。では、僕がちょっとやってみるから。切り口をよく見ていて」

生徒全員の視線が、森田先生の手元に集中する。きれいな指先だなぁ、と思っていたら、ナトリウムはいとも簡単に包丁でさくっと切れてしまった。同時に切り口に膜が張ったように変色する。

「では、これを水に入れてみます。ちょっと待っていてね……」

少し形はいびつだけど、大体１０等分になったナトリウムの小片を自分の席に持ち帰った。そしてナトリウムの小片を水に放り込ん

で、蓋をする。
「きゃあっ！」
あたしが持ち帰ったナトリウムの破片が大きかったらしい。そして瓶にヒビが入っていたことも災いしてか、瓶がものの見事に爆発して、その破片で左手を切ってしまったのだ。制服も水浸しである。
「美濃！大丈夫？」
先生が白衣を翻して、ふきんを持ってあたしの元に駆け寄ってくる。
「だ、大丈夫です……」
制服をあらかた拭き終わったところで、先生があたしの左手の傷に気がついたらしい。
「全然大丈夫じゃないじゃないか……保健室に行くよ！」
「えっ……」
目を見開いたあたしの右手をつかみ、先生が走り出す。
「今日の部活は終わり！解散して！」
いつになくあせった様子の先生。まだ、頭の中でなにが起こったのか整理できていない。
「先生……あの、あれはあたしがうっかりヒビの入った瓶を……」
「いや、あれは僕が悪いんだ、ちゃんと監督していなかった僕のせいだよ」
表情は伺えないけれど、先生の背中が申し訳ないという気持ちを如実に語っている。あたしはもうそれ以上何も言えなかった。

保健室での手当てが終わったあと、先生はあたしを家まで送り、親に謝罪すると言っていた。
「先生、そこまでしなくてもいいです」
そう言ったあたしに先生は首を横に振り、
「生徒に傷を負わせたのは僕の責任だから」
その一点張りだ。他の先生ならおそらく「自己責任」の一言で済ませるだろうし、事実あたしの今回の事件だってそうだ。よく見な

いでヒビの入った瓶を手に取ったあたしの責任。でも先生は「自分の責任」と言って譲らない。
結局両親は先生の真摯な態度に怒りもせず、逆に先生が帰宅してからあたしが怒られる始末。そう、これでよかったんだ。
――でも。
日記帳に今日の出来事を書きながら、あたしは思う。
――あれが詩織であっても誰であっても、先生は同じことをするんだろうな。
あたしにとって先生はすごく特別な存在。でも、先生はあたしを一生徒としてしか見ていない。それがものすごくつらくて、悲しくて、切なくて。
物理の参考書に涙が落ちるのも気にせず、あたしは声を押し殺して泣いた。

泣き疲れていつの間にか眠っていたらしい。ベッドに置かれている目覚ましではっと我に返る。
早く準備しなきゃ。でも予習してない……。構わない、早めに学校に行ってそれから予習すればいい。少し腫れた目を冷やすために冷たい水で顔を洗う。まだ目の腫れは引かないけど、仕方ない。

でも、運が悪い日って言うのはあるもので。
「えー、今日は千葉先生が忌引きで欠勤なので、代わりに僕が出席を取りに来ました」
……出たよ、副担任森田先生。ああ、この顔だけは見られたくなかった……って、物理の授業があるからどっちにしてもアウトだ。
「えーと、美濃、美濃？」
考え事をしているうちに点呼の順番が回ってきたらしい。
「はっはい！」
「はい、じゃあ今日はここまで」

物理の授業は４時間目。これが終わったら昼休みだ。
「えー、物理担当の生徒……美濃だね。昼休みになったら物理準備室に来て」
「はい……って、え？」
最後は聞こえないように返事をする。今日はノートの回収も何もないはず。ましてやテスト前でもないし、物理の授業は終わったし、特に片付けるものもない。

「うーん……なんだろうね」
学食にて。どうにか席を確保して、ハンバーグ定食に箸を伸ばすあたし。一方の詩織はラーメンをすすっている。
「昨日の部活のことじゃない？」
詩織はあのあと先生があたしの家にまで行ったのを知らない。
「あれはもう、解決したことだし……」
「じゃあ朝の智美ちゃんの様子だよ。あれだけ観察力がある先生だもん、智美ちゃんが目を腫らしてるのに気づかないわけがないって」
詩織にはとっくにバレていた、ということは、朝のあたしは相当酷い顔をしていたんだろう。先生が気づかないはずはない。
ハンバーグ定食（ご飯少な目）を平らげたあと、あたしはいったん詩織と別れ、物理準備室に向かった。

「失礼します」
物理準備室のドアをノックすると、中から「美濃だね？どうぞ」との先生の声。先生は物理準備室にいることが多くて、コーヒーをすすりながらテストの採点なんかをしているらしい。
「じゃあ、そこに座って」
適当に用意されたパイプ椅子に座り、先生が何を口にするか待つ……もっとも、先生が言うだろう言葉はあたしにはすぐにわかったけど。
「昨日は本当にごめん。僕がちゃんと見ていなかったから」

ほら、やっぱりこれだ。でもこういう真摯な姿勢で生徒に向かう教師はそうそういない。だから、……正直に言って、森田先生はものすごく人気がある。あたしなんかじゃダメなくらい。でも、諦められないのがあたしだ。

「大丈夫です、さほど酷い怪我ではありませんでしたし。それに……」

ちょっとくらいのジャブなら先生は許してくれるかな。

「先生の真摯な姿勢にうちの両親も喜んでいたし、あたしも嬉しかったです。だって、あたしは……」

「何？」

先生の何も知らないような瞳に、ガックリ肩を落としてしまう。

「こんなに真摯な姿勢で生徒と向き合う先生とは初めて出会ったからです」

仕方なしに、適当に取り繕った返事をする。だめだ。先生ってば何も気づいてない。わざとなのか本当に気づいていないのか。

「そう思ってくれているならよかった。コーヒーでも飲んでいく？」

用意されたコーヒーに少し口をつけたところで、再び先生からの質問。

「そういえば、今朝目を腫らしていたような気がするんだけど、……やっぱり、昨日の怪我のこと？」

ああ、この人は本当に鈍いんだな、って思う。全然違う。あたしが泣いていたのは先生との関係のことで思い悩んでいたからなのに。

「えっ……もう子供じゃないんです、そんなことで泣きませんよ。あたしが悩んでいるのは……」

言いかけて、やめた。言っても無駄だと思ったから。

「そうか。じゃあ、悩み事があったらいつでも相談に乗るから。僕は職員室よりここにいることのほうが多いから、まずはここに来てくれたほうがいいと思う」

そして、やっぱり消化不良のまま、あたしは予鈴に合わせて物理準備室を出たのである。

昨日の事もあって、科学部は今日は休みになっていた。そんなわけで、寄り道ついでにハンバーガーでも食べようと、詩織と一緒にハンバーガーショップに向かった。
「……で、詩織はどう思う？」
薄っぺらくてペなペなのチーズバーガーを一口頬張ったあと、今日の昼休みのいきさつを詩織に話す。
「どうって……でも森田先生が鈍感なのはみんな知ってるよ。大体の子はそれで面倒になって諦めちゃうぐらいだから、よっぽど直球でアタックしないと無理かもね」
「でも直球はなぁ……」
何度も詩織に言われた言葉。

「いくら智美ちゃんでもわかってるでしょ？教師と生徒の恋愛はご法度、って」

その言葉があたしの理性を失わせない枷になっている。それはそれでいいんだけど、やっぱり気持ちは止められない。たとえ先生がどんなに鈍くても。
「卒業まで中途半端に時間あるもんね……あたしたちが3年になったら色々考えてもいいんだろうけど……って、受験とかでそれどころじゃないか」
「うん」
「ところで智美ちゃんはどこ受けようって考えてる？」
「うーん、H大の理工学部かな。物質工学科」
無論、森田先生が卒業した学部だ。
「じゃあさ、それに便乗して勉強教えてもらうとか……」
「それだ！」
名案だ、そんなの思いつかなかった！これはやらなくちゃ、必須事項じゃないか。何で今まで忘れていたんだろう……！

その夜、部屋であたしはＡ５サイズの小さなノートに向かっていた。予習やら課題を済ませた後、日記と一緒に短歌をつくるのがあたしの趣味になっている。森田先生がいなかったらこんなことはなかったと思う。

「化学式物理法則の隙間に私の居場所つくって欲しい」

それをノートに書き付けて、あたしはベッドに入った。どうせ眠れもしないのはわかっているのに。それほどに、先生への想いは大きくなっていた。

翌日。

あたしは短歌を書き付けていたノートを持って物理準備室に向かっていた。あたしは現国や古典の先生とは仲が悪いわけではないんだけど、なんとなく頼みづらい雰囲気があって。

それで、結局森田先生に教えを請う、というか短歌を選んでもらうことにしたんだ。選んでもらう、というのは先生への想いを見てもらうことになる。さらに選ばれた短歌を県総合文化祭の文芸部門に応募することになっている。

これなら、先生でも気づくかな……？

「失礼します」

昨日と同じようにドアをノックして、先生からの返事を待つ。

「美濃だね？どうぞ」

ドア越しにくぐもった先生の声がする。それを確認して、あたしはドアを開いた。そこにはコーヒーをすすりながら授業解説用のノートを確認する先生の姿があった。

「で、短歌を僕に見てもらいたいんだよね。美濃がそういう趣味を持っていたなんて知らなかったよ」

「あ、でも、今年になってからだから、あんまりうまいこと書けて

はいませんよ……それに、あたしがこういう趣味を持っているのは詩織と先生だけです」
「ああ、加藤か。美濃と加藤は仲がいいからね」
「はい」
そう言って、あたしは先生にノートを差し出した。

いつもより速めに文字を書いてみるそれでも六十五分は長い
僅かでも席離れると君見えず近眼恨む席替えの日
会いたくて今すぐ「ごめん」言いたくて早く終わってしまえ授業よ
壁越しに低く伝わるあの声に意識委ねて再度舟こぐ
「これでいい？」視線絡まり分かってたはずの公式どこか飛び去っていく
化学式物理法則の隙間に私の居場所つくって欲しい
あなたなら話せるそんなこともある愛じゃなくても君じゃなくてはまだ数少ないけれど、毎晩必死で頭をひねった結果だ。先生はふむふむといった感じであたしの書いた短歌を黙読している。
「うん、これとかいいんじゃないかな」
先生が3つの短歌を指差す。

僅かでも席離れると君見えず近眼恨む席替えの日
「これでいい？」視線絡まり分かってたはずの公式どこか飛び去っていく
あなたなら話せるそんなこともある愛じゃなくても君じゃなくては

「先生はそれが好きなんですか？」
「そうだね。それに、美濃の想いがすごく伝わってくるのが何より大きいかな」
ということは、先生は……気づいたのかな？
「こんなに美濃に想われてる人は幸せだと思うよ」

……結局、あたしは昨日と同じく肩をガックリ落として物理準備室をあとにしたのだった。高校総合文化祭に出品する短歌はこれで決まったけど、残ったのは釈然としない気持ち。先生はわざとあたしの気持ちに気づかない振りをしているんだろうか、それとも本当に気づいていないんだろうか。

ガックリ肩を落としたのはあたしだけじゃなく詩織も一緒だったらしい。

「智美ちゃん……それ、本当に気づいてないだけだと思うよ」

帰りのバスで、あたしの書きためた短歌を眺めながら、詩織は大きくため息をつく。

「これで気づかないって事はよっぽど先生、鈍いんだろうね……」

「うん。なんかもう、心折れそう……」

「でも、ここで折れちゃダメだよ」

詩織らしくない言葉に、あたしはひょいと顔を上げる。いつもなら詩織は、「教師と生徒の恋愛はダメ」って言うはずなのに。

「おおっぴらにはできないけどさ、あたしだって智美ちゃんのこと応援してるんだよ」

「詩織……」

「智美ちゃんが幸せならあたしも幸せだからさ」

「……」

しばらく言葉を失ったけど。

「詩織、ありがとう」

短歌を書きつけたノートを受け取りながら、あたしは詩織に感謝の念を口にしたのだった。

そして、夏服の季節がともなくやってくる。紺色のベストに紺色のスカート、エンジ色のネクタイ、そして白い半袖のブラウス。あたしたち女子生徒はそんないでたちになっていた。

そんなある日。昼休みにたまたま保健委員の男子生徒に用事があ

ったから声をかけようとしたんだけど、
「榊君、ちょっと……」
「え、美濃？」
……うっかりにも程がある。みんな夏服だから後姿だけでは誰が誰だかわからない。というか、前から見てもみんなネクタイをしているから遠目ではみんな同じ人に見える。
で、あたしが後姿を頼りに声をかけたのが、榊君じゃなくて、森田先生だった、というわけ。
「あ、えと、その……すみません、間違えてしまいました」
「いいよ、気にしないで」
先生はいつものようにふわっと笑う。そして直後、何かを思い出したように表情を変える。
「あっそうだ、美濃、時間いいかな？」
「は、はい！」
すっかり保健委員への用事など頭から吹っ飛んでしまい、あたしは先生とともに物理準備室に向かう。物理準備室っていうことは、もしかして……。
「次、物理の授業だから教室にこれを持って行ってくれないかな」
……。あは、あはは、そうだよね。もはや苦笑というか、失笑しか出なかった。

「えーと、今日からは音波について勉強するわけなんだけど……。」
物理の授業にもすっかり身が入らない。裏を返せばこれをネタに補習を受けることもできる、ってわけなんだけど。
おかげで中間テストは学年1位だったのに、期末では8位まで落ちてしまった。それも、物理だけ。
「それでも順位1桁ならまだいいじゃない」
なんて詩織は言うけど（ちなみに詩織の成績はどの教科も中の下だ）、やっぱり納得がいかない。
「詩織」

「え？」
あたしはひとつの決意を込めて、言葉を続ける。
「あたし、夏休みに森田先生から補習受ける」
「でも、いいじゃない、智美ちゃんなら補習いらな……あっ」
そこで、物理だけ順位ががくんと落ちたのに気づいたんだろう。
そして、あたしが考えていたことも。
「わざと成績落としたわけじゃないんだよね……なんか授業が来るのが怖いっていうか」
「そっか……」
張り出された成績表を前に、あたしと詩織は大きくため息をついた。

「補習？いいよ、夏休み中は部活も午前中で終わるしね」

でも、美濃はそんなに成績悪くないはずなんだけどなぁ……などと言いながらも、夏休みの午後の補習を了承してくれた。補習が行われるのは物理準備室。いつものパイプ椅子に座ってテーブルに向かい、先生お手製のプリントの問題を解き、解説を聞いていく。
「で、わからないのはどこかな？」
「えっと……ドップラー効果のあたりです」
「わかったよ。えーと、まずは……」
しばらく真面目に机に向かう。あたしの横には先生が座って、詳しく解説をしてくれる。もしかしたら授業での解説よりわかりやすいかもしれない。身の回りの例を出したりしてくれて、数式じゃなく感覚でわかってきたような気がする。
「これでいいかな」
「はい、ありがとうございます」
シャープペンシルをノートの上に置いて、先生に一礼する。そこからは何故かお楽しみ？の雑談コーナーになってしまう。
「でも、美濃はかなり成績がいいのに、どうして補習を……」

そりゃ先生と話す機会を増やしたいからに決まっているでしょう、と思いながらもそれを口にしてはいけない。
「もしかして、全教科で一番にならないと気が済まないとか」
「それもありますけど……」
そう、あたしは負けず嫌いなんだ。だから全教科でトップの成績を収めたい、と言う気持ちは否定できない。でも、それを目指す理由は……。
「先生と同じ大学の学科に行きたいんです」
「えっ……」
直球で先生にあたしの決心を告げる。これで気づかなければもう終わりだな、と思いながら。
「そうか、じゃあいくらでも相談に乗るし、どんなことやってるかも教えてあげるね。でも、美濃ならもっとレベルの高い大学狙えると思うけど……」
「あ……」
さすがにこれにはショックを受けた。
先生は本当に、本気で気づかないのか。ここまで言っても。それともあたしの思いを否定して諦めさせようとしているの？
「……います」
がっくりと首を落としたまま、あたしはポツリとつぶやく。伸ばしかけの髪で、先生からあたしの表情はうかがえないだろう。
「え、どうしたの？美濃？」
何も知らないのか、知っているのか。先生は慌ててあたしに問いかける。突然様子が変わったあたしに驚いたのだろう。何か地雷でも踏んだのか、と。
そう、先生は散々地雷を踏み続けた。今回のは特に大きな地雷だ。
「違います！」
顔が涙で濡れるのも気にせずに、椅子を倒す勢いで立ち上がる。
さすがに先生も驚いたのだろう。
「美濃……？」

そこからはもう何も考えられなかった。
先生の白衣の胸倉をつかみ上げ、先生の頬を思いっきり平手で打ってやった。先生も痛いだろうけど、あたしも痛い。
先生を殴った手も痛いけど、心はもっともっと痛かった。
「……」
けど、もう止まらない、体が止まることを許してくれない。頬を押さえ、さっき以上に呆気にとられてる先生に、あたしは思いつく限りの酷い言葉を投げつけてやった。
「何でそんなこともわかんないの！？　それでも教師！？　あたし……」
情動に流されすぎて、余計なことまで言いそう。だめ、その先を言ってはいけない。詩織が何度も言った言葉が頭をよぎるけど、もうそんなのどうでもよくなっていた。考えるより口が動くほうが早かった。
「あたし、先生のこと好きなのに！こんなに好きなのに！」
――気づいたら、あたしの瞳に移る先生は涙で歪み、ぼやけている。なんか、ぶん殴ったのにカッコつかないな。そう思ったら。急に恥ずかしさが全身を駆け上った。
早く、一刻も早く、この場を離れなければ。
「――っ、失礼します！」
言葉を失った状態の先生の胸を向こうに押しやり、そのまま立ち去ろうとする……けど、それはかなわなかった。
ドアノブが、回らないのだ。
どうしてなのかわからなくて、鍵を回すところまで頭が回らなくて。そうこうしているうちに先生があたしの元へ近づいてきた。何？先生の言葉が怖い。これほどまで先生が怖く感じたのは久しぶりだった。
「まさか……」
あたしがそう呟くのと、先生があたしを後ろから抱きしめてくるのはほぼ同時だった。一瞬何が起こったのかわからなかったけど、

このぬくもりは、先生のものに他ならない。先生の柔らかな髪が頬に触れてくすぐったい。
「美濃」
あたしの名を呼ぶ先生の声はどこか熱っぽい……あたしの気のせいじゃなければ。でも、気のせいなんかじゃないって、先生の次の言葉が証明してくれた。
「先生、なんで……あたし今、ひどいこと言ったのに」
「ずっと前から美濃のこと、好きだって言ったら、納得してくれるかな」
それは待ち望み続け、でも諦めかけていた言葉。けど……
「あたしがどれだけ先生のこと好きってアピールしても、先生気づかなかったじゃないですか」
もう涙は引っ込んでいて、でも涙声で先生に抗議する。でも先生はあたしを決して離そうとしない。
「真面目で一生懸命で、すごくまっすぐな子だよね。美濃は。今だってそうだった。僕はね、あの短歌を見せてもらったときからずっと美濃のことが好きなんだよ。あんなに想われているなんて、すごく嬉しかった」
「先生……」
「二人のときは智美って呼んでいいかな」
勝手に話を進めていく先生。一度恋に落ちたらあとは素早い、そういう人らしい。
「はい……」
こくんと頷く。刹那、あたしを抱きしめる力が少し強くなった気がした。

そんなことがあって、あたしの物理の成績は再び学年トップになり、詩織をも驚かせることになった。
「智美ちゃん、どうしたの……？」
「なんでもないよー」

きょとんとしている詩織と一緒に、化学室に向かう。今日も部活があって、個人個人の課題に挑戦することになっている。あたしはフルートを使って共鳴の実験をすることにしている。

そして部活が終わったあと、あたしは詩織と別れて物理準備室でコーヒーをもらっていた。一応お互いに想いあっているのはわかったんだけど、ちょっと含みを持たせたことを言っても、絶対気づいてくれない。

キスして欲しくて先生のことじっと見つめても、気づかずにのんびりと地球の神秘について語ってる。想いあっているだけで幸せなんだけど、さすがにこれはちょっと、切ないなぁ。

「ん、どうしたの、智美？」

何も知らないような笑顔で先生は言う。いや、「ような」じゃなく、本当にこの人はあたしの心中をわかってはいない。つきあいはじめてからちょっとはよくなるかな、って思ったけど、どうやらそうはいかないらしい。

「……なんでもないです」

ちょっと頬を膨らませて言い返すと、今度は急に抱き寄せられて。

「智美。ちゃんと言って。僕は鈍いから、ちゃんと素直にホントのこと言ってもらえないと、気持ちをわかってあげられない」

……う。

先生は相変わらず先生だけど、今までと大きく変わったのが、これ。どうやら先生は恋するとものすごく情熱的になる人らしい。もちろん、あたしの心の準備ができるのは待っててくれるけどね。

今はまだちょっとのんびりしたお付き合いを続けているけど、そのうち、キスとか近いかな……？

と思っていたら、先生の顔が急に近づいてきて、ふわりと軽く唇が重なった。

完全に、不意打ちだった。

「先生、今何した……」

「智美。好きだよ」
切実な先生の言葉に、胸が詰まる想いになる。本当に先生は、あたしのこと好きなんだ……。
「あたしも、先生のこと、好きです」
そう言った瞬間、あたしの携帯電話が鳴り出した。そういえばバスの時間にアラームをかけていたんだったっけ。
これが最終バスだから、逃すと帰れないんだよなぁ……。でも、先生と一緒にいたいし。しばらく逡巡して、結局、
「先生、あたし帰らなきゃ」
素直にバスで変えるという選択肢を選んだのはいいけれど、先生はすごく不服そうな顔をしている。
「どうしたんですか？」
「送っていくから、もう少しここにいて」
予想外の言葉。そんな目で見つめられると、頷かざるをえない。
いつばれるかもわからないこの関係。目指すは結婚、といきたいところだけど、先生はあたしが卒業するときに気づいてくれるかなぁ……。

（後書き）

高校時代に書いた小説のフルリメイク版です。
教師と生徒の恋愛ものが大好物なのでついつい書いてしまいました。
後日談も書きたいんですけどねぇ。新婚もの。
でもなんかぐだぐだになって終わりそうなのでこのままでいいような気がします。
わたしにしてはちょっと長めの短編になりましたが、詠んでくださってありがとうございます！

ＰＤＦ小説ネット発足にあたって

ＰＤＦ小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は２００７年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にＰＤＦ形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのＰＤＦ小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能（たんのう）してください。

この小説の詳細については以下のＵＲＬをご覧ください。
http://ncode.syosetu.com/n7800s/

REDZONE

2011年4月27日11時10分発行